

酒 米 に 関 す る 試 験

酒米品種西海 134 号の栽培様式よりみた心白の発現と収量性について

野中和弘・中野正敏・金山 拡
(佐賀県農継試験場)

NONAKA, K., NAKANO, M. and KANAYAMA, H.
Cultivation Experiments on the Rice Plants for "SAKE" Brewing.
On the Frequency of White Core Grain and the Yielding Potential
of SAIKAI 134 in Several Cultivation Types.

良質な酒米は「粒が大きく 粒張りがよく 心白が中心に鮮明に出ており、歩留りの高いもの」といわれている。供試品種西海134号は従来の長稈穂重型とは異なり短稈穂数型で良質多収性を備えている系統である。しかし心白の発生率、収量性については栽培法によって変動がみられた。そこで再度昭和49年度に栽培様式別に検討を加えていくつかの知見を得たのでその概要を報告する。

1. 試 験 方 法

供試品種は西海134号、栽培様式は成苗移植、稚苗移植、乾田直播によった。移植月日は成苗6月下旬、稚苗6月中旬で、乾田耕起直播は5月下旬に(播種)した。栽植密度は成苗25m×18cm、稚苗32cm×15cm、乾直27cm×15cm、その他耕種概要は県基準に従った。

2. 試 験 結 果 と 考 察

生育概要：草丈の推移は成苗が高く、茎数は稚苗が多く経過した。有効茎歩合は成苗、稚苗が高く、直播は前年同様低くなった。出穂期では成苗が他の様式より3日、成熟期では2日早くなった。稈長、穂長では成苗が長く、稚苗、直播は穂の短小化が目立った。m²当りの穂数は稚苗、直播が多く成苗は少なかった。しかし一穂穎花数は逆に成苗が多く着生した。

収量性：玄米収量は表1のとおりで稚苗栽培がやや多収でありこれは単位面積当りの穎花数の影響が大きく出

第1表 収 量 構 成 要 素

様 式	m ² 当り 穂 数	1 穂(m ²) 穎 花 数	登熟歩合 (%)	玄 米 千粒重 (g)	10 a 当り収量 (kg)
乾 直	326	61 (2.1)	89.7	27.7	57.3
成 苗	275	75 (2.1)	90.5	27.9	55.4
稚 苗	367	64 (2.3)	84.5	27.8	58.1

たものと思われる。特にこの系統は一穂穎花数が少ない。そこで収量を確保するためには単位面積当りでの穎花数の確保が前提となる。このためには小株密植の栽培様式とする必要があるように思われる。なお玄米千粒重では各栽培型ともあまり差は認められないが登熟歩合では若干稚苗が低くなった。そこでこれらのことからa当りの収量を安定的に60kg以上確保するための条件としては、m²当穂数350本以上、一穂穎花数65粒以上、登熟歩合90%前後、玄米千粒重28g以上を確保する必要がある。

心白率：心白率は表2のとおりで様式別により差は判然としない。しかし枝梗別では明らかに1次枝梗が心白の発生率が高く、なかでも稚苗の発生率は成苗より高い。なお様式別に強勢穎花の割合をみみると成苗は60%位であるのに稚苗、直播はそれより5%前後高い割合である。そこで心白の発生を求めるならば強勢穎花を多くつける栽培様式が望まれ、この様式は稚苗が適当であろうと推定された。

第2表 品 質 お よ び 心 白 率

様 式	枝梗別心白歩合 (%)		平均 心白 歩合	腹白	乳白	検査 等級	搗精 歩合
	1 次	2 次					
乾 直	30.0 (3,389)	21.2 (1,778)	29.1	少	ゴクビ	3下	90.1
成 苗	31.1 (3,555)	21.8 (2,124)	30.1	少—中	〃	〃	90.1
稚 苗	38.4 (2,531)	18.4 (1,312)	33.7	少—中	〃	〃	89.4

注) ()内は全調査粒数である。

(なお直播は全体的に生育量が不足した。) 以上のことから結果を要約すると多収良質前を得るためには稚苗移植栽培で小株密植の栽培様式が適当と思われる。なお今後は栽植密度についての検討が必要であろう。